特集

VoIPで塗り変わる電話サービスの常識

音声通信をIPネットワーク上で実現するVoIP技術が、第一種通信事業者のサービスにも持ち込まれるようになってきた。新興のフュージョン・コミュニケーションは、4月からVoIPによる一般市外電話サービスを開始する。既存の大手事業者もJPバックボーンを活用したIP-VPNサービスでVoIP対応に着手し始めた。通信市場でネットワークのIP化が大きく取りざたされる中、100年の歴史を重ねてきた電話の世界も、VoIPによって大きな変革の時を迎えようとしている。

PART 1 フュージョン登場のインパクト

料金表から“距離区分”が消えた 全国一律3分20円に問い合わせ殺到

「予想以上の問い合わせがきている。特に1月11日は、コールセンターもWebもパンク状態だった」――今年1月10日、全国一律3分20円の市外電話サービスを発表したフュージョン・コミュニケーションズ（以下、フュージョン）のあるスタッフは、ユーザーからの反響の大きさをこう打ち明ける。

そして、同社のサービス内容は、競合する既存事業者をも少なからず震撼させた。価格もさることながら、これまで市外電話サービスでは常識だった“距離別”の料金体系をあっさりと打ち破ったからだ。

これを実現できたのは、VoIP技術を駆使し、音声通信をIPバックボーンネットワークに集約したからにほかならない。国内の第一種事業者として一般電話サービスにVoIPを適用したのは同社が初めて。

そもそもVoIPは、パソコンを使ってインターネット経由で電話をかける「インターネット電話」のための技術としてスタートした。

この仕組みは、長距離通話の中継網部分にインターネットを用いることによって電話代を大幅に安くできるが、当時は技術的に未成熟だったことや、公衆のインターネットではQoSを確保できないことから、通話品質の面で“安かろう悪かろう”のイメージが先行し、一部のPCマニアが自前で利用するという程度の市場にとどまった。

しかし、その後、技術のめざましい進歩とあいまって、専用のIPネットワークによる運用ノウハウも研究されたことで、二種事業者を中心に商用サービスが提供されるようになった。そしていよいよ、一種事業者による一般電話サービスでの活用が始まったのである。

果たしてVoIPは、電話の世界をどのように変えていくのだろうか。まずは、フュージョンの戦略から紐解いてみることにしよう。